

2022年4月10日復活前主日説教

イザヤ書 52章 13-53章 12節

フィリピの信徒への手紙 2章 5-11節

ルカによる福音書 23章 1-49節

本日は、復活前主日です。2020年初頭に始まったコロナ禍のため、過去2回の復活前主日が、礼拝自粛であったと思います。本年2022年は、今まで通りとは言えませんが、棕櫚の葉を持って聖堂に入堂し、また先週火曜日に作った棕櫚の十字架の祝福をし、皆様にお配りします。コロナ禍の終息はまだ先かかもしれませんが、社会全体が少しずつ回復に向かっているように思えます。

しかし、コロナ禍とは別に、平和のしるしではなく、戦争の暗い影が全世界を覆い始めているようにも思えます。そのような中で、わたしたちはわたしたちの教会を通して、本日から聖週を迎え、また次主日、主の復活をお祝いします。このような時期に、あらためて、わたしたちが教会に集められている意味、そしてわたしたちの教会で祈る意味を深めたいと思います。

復活前主日の福音書は、聖週・受難週に入る主日ですので、非常に長い箇所が指定されています。本来でしたら、かっこ[]の部分は何人かの方に読んでいただき、また群衆の部分を皆さまに読んでいただき、朗読劇のようにするのが理想的ですが、本日は、その部分は省略して、聖職が朗読することとしました。それでもかなりの長さがあり、全体を詳細に解説することは困難です。それゆえ、聖週と復活日を迎える準備として、旧約日課「イザヤ書」から学びたいと思います。

本日の箇所は、「**見よ、わたしの僕は栄える**」（イザヤ 52:13）と始まる通りに、「わたし（主）の僕」という人物について語っています。それゆえ、新共同訳の小見出しでは、「主の僕の苦難と死」となっています。その内容から教会では伝統的にこの箇所を、主イエス・キリストの受難と関連させて重んじてきました。内容を確認するために、52章13-53章12節の内容をあえてまとめますと次のようになります。

「主の僕」は栄えるのですが（52:13-15）、多くの人々によって誤解され、彼は受難にあつて苦しみ、命を取られる（53:1-8）。その苦しみと死が人々の罪を担う行為であったことを人々は知り（53:8-10）、その受難の意味を告白し、最後に主なる神様が僕の姿の意味を明らかにする（53:11-12）という流れです。物語の文体ではありませんが、物語性のある内容です。イエス様の時代より約500年前に書かれたと思われる文言ですが、イエス様のご生

涯をまとめて示しているようにも思えます。ただし、この「主の僕」が誰を示しているのか、あるいは誰を題材として描いているのかは明らかではありません。それゆえに、この人かもしれないと、いろいろな人が推測されていました。

バビロン捕囚の終了後、神殿再建に尽力したユダヤ人たちの指導者の一人にゼルバベルという人がいます。「主の僕」は、このゼルバベルであると推測されることがあります。確かに、「イザヤ書」のこの部分の背景は、ペルシア王ダリウスの時代です。イスラエル・ユダヤ人たちは、「油注がれた者（メシア）」ペルシア王クロスによってバビロン捕囚から解放され、またさらにそのクロス王の勅令に基づき、エルサレム神殿を再建します。その時、中心人物として尽力した人物の一人がゼルバベルです（エズラ 2 章～5 章）。彼は多くの誤解や反対を経験しながらも、神殿再建を完遂するのですが、彼の最後は明確ではなく、また伝承も数多く存在します。それゆえにこの個所とのつながりは明確ではありません。そのほかには、この「主の僕」は、ペルシア王クロスであるとか、その時のペルシア王ダリウスであるとかとも言われるのですが、問題点となるのはそこだけではありません。「わたしの僕（主の僕）」（イザヤ 52：13-15）と、「苦難の僕」と呼ぶべき人物（イザヤ 53：1-12）が同じ人物か否かも疑問になるからです。さらには、「メシア（油注がれたもの）」との関係を、どのようにとらえたらよいかも疑問になるからです。

『聖書（旧約）』自体の解釈から言えば、「メシア」「主の僕」「苦難の僕」、それらは一応区別して考えることが大切です。『聖書（旧約）』では、それらが一致することはないからです。しかし、教会の解釈では、同一と考えます。つまり苦しむ者とメシアとを同じ人物と考えるのです。教会は、『聖書（旧約・続）』自体からは引き出せない、苦しむメシアという意味・概念を、ここから引き出したということです。教会のこのような『聖書（旧約）』理解は、「イザヤ書」そのものの時代的背景を前提とした解釈としては、読み込み過ぎといえるかもしれません。しかし、初期の教会のキリスト者たちにとって、『聖書』は、「旧約と続」のみでした。彼らは、主イエス・キリストの生涯の意味を深く理解するために、『聖書（旧約と続）』からその理解のための鍵を得たのです。

一般的に、人間は目撃したこと、あるいは伝えられたことを理解しようとするとき、何の知識的前提もなく理解することはできません。既に得た何かと結びつけて、あるいは結びつけないことを通して理解します。ことに『聖書』の世界では、主なる神様がなさったことを、勝手に自分の考えや、他の人間の思想などから理解することをしません。それゆえ、主なる神様が与えられた言葉『聖書』に基づいて考えることが大切となります。最初の教会の人々

は、イエス様の十字架の死と復活を伝えられており、そこに救い、喜び、すなわち福音があると知り信じていました。そして、自分たちの信じている事柄の意味を、『聖書（旧約と続）』を読むことを通して、より深く理解したのだと思います。その点に関しては、『聖書（新約）』からも理解できるわたしたちよりも、想像力豊かにイエス様について『聖書』から学んでいたといえるかもしれません。

これらのことから、本日の旧約日課に、二つのことを学びたいと思います。一つは、「主の僕・苦難の僕」に示されるように、無実の罪で苦しんでいる人、罪を無理やり負わされた犠牲者を忘れてはならないということです。そのような人は、「イザヤ書」の時代のみならず、その後の歴史にも、現代にも存在します。キリスト者は、それらの苦しむ人々の存在を決して忘れてはならないのです。もちろん、過去を記述する歴史記述は、全てが正しいわけではありません。また、現代の報道は、写真や映像を用いて客観性を強調して伝えますが、客観的な事実をすべて伝えられるわけではありません。また一定の思想や政治意図に基づいて捏造された報道、ことに人命にかかわる報道は、その犠牲者をさらに苦しめる結果となります。報道された内容をそのままを信じ受け入れることに、わたしたちは注意しなければならないのですが、誰かが苦しみあるいは死を迎えたことに、キリスト者は、無関心であってはならないのです。

次にそのように苦しむ人々を認識した時、どう理解しまた対応するかです。苦難とは、苦しむ側にも全く何の責任もないのかと問いを立てる人もいます。確かに、そのように問うこともできるかもしれません。しかし、まったく何の責任もないにも関わらず、降りかかる苦しみもあります。すくなくとも、大人が勝手に引き起こした苦しみにおいて、幼い子供たちには何の責任もないでしょう。それでは、存在している苦難、起きてしまった苦しいを、どのようにとらえたらよいのでしょうか。一つには、その苦しみとは、周囲の人のためなのだと考えることがあります。そして、そこから周囲の人が必要な事柄を学ぶことが大切だということです。本日の個所、「苦難の僕」はそのような観点で描かれているとも考えられます。しかし、苦しみの中にある本人の立場から言えば、なぜ周囲の人のためにわたしが苦しむのかという疑問は、当然起こると思います。その意味では、このようなとらえ方であっても、傍観者的に語る時、かえって苦しむ人の苦しみを増すことになると思います。

誰かの苦しみを認識することも、そこから何かを理解しようとすることも、人間の思いで行おうとすれば、限界があると思います。しかし、そうであるがゆえにイエス様の苦難と死という出来事が大切なのです。死に至るまで優しさを貫かれた、愛を貫かれたイエス様の姿に、本当の平和（神と人

への平安)があるからです。そして、どのようなことがあっても、わたしたちは力と勇気を与えられるからです。最初の教会の人々が、イエス様を通して、「イザヤ書」のこの箇所から、『聖書(旧約)』という枠組みを超えて、主なる神様がわたしたちに示そうとされた意図を、くみ取ることができたように、わたしたちもイエス様を通して、この世界で起きた、あるいは今起きている苦しみを理解し、それに対して何をすべきかを示されるのです。

この世界に起こる、あるいは、今、起きている苦しみに対して、主イエス・キリストを通した主なる神様への信仰を持っているわたしたちできること、それはそのような苦しみを、主なる神様が決して見過ごしていないと信じること、それゆえにわたしたちも目をそらさないこと、そして、復活の希望が、それらの悲しみをそのままにしておかないことを信じ続けることです。そこから、わたしたち一人ひとりに、あるいは一つの教会が歩むべき道が示されると思います。

教会が始まったのは、イエス様が復活されたからです。復活から、わたしたちは、イエス様が何をなさったのかに気づきました。ただし、その復活とは、単なる死者の蘇生ではなく、神の子という主なる神様と同質の方の、十字架の苦しみと死を経て起こった出来事です。復活なしに教会の始まりも、わたしたちの信仰も希望もありませんが、苦しみの象徴である十字架の死がなければ、その復活もありません。それらすべてが福音です。

イエス様のご生涯についての、最初にまとまって報告したのは、「マルコによる福音書」であるといわれています。しかし、そのマルコ成立以前に、イエス様の受難については、まとまった記憶、言い伝え、物語が存在していたであろうと考えるのが定説になっています。それらが基となった、ルカによる受難の物語を本日ともに読みました。それらは、単なる記憶ではありません。この世界に、どの様な苦しみがあっても、死が終わりではないという希望と同時に、その希望からこの世界に愛が満ちることを、今も示し続ける物語です。

大斎節が最後の週となり、もっとも大切な受難週・聖週に入ります。イエス様の受難の物語を今年も改めて学びます。わたしたちは、福音書に描かれている登場人物たちのように、イエス様について誤解しやすい存在です。悲しい出来事がたくさん起きてしまうからこそ、希望を失ってしまいそうになる存在です。しかし、だからこそ、主イエス様のご受難と学び、復活の希望を持つことが大切なのです。今年も改めてそのことをご一緒に確認するために、これからの聖週を迎えたいと思います。そして、喜びと希望をもって、復活の日を迎えたいと思います。